

# 美しきものはそれぞれに美しく、共存しうる

## ——本川達雄『生物多様性』を読んで

寧波大学 潘俊傑

本川達雄の科学読本『生物多様性』<sup>①</sup>を読んで、費孝通の箴言「美しきものはそれぞれに美しく、共存しうる」を思い出し、「人類」と「生物多様性」の密接な関係に再解釈するのがとりわけ適切そうです。

同書は『生物多様性』と銘打って生物の進化、遺伝の進化など生物の多様性を理解するために必須の知識を分かりやすくまとめているだけでなく、倫理学の視野と融合して価値判断を行う「私」の定義を論理的に探求しています。内容が精確で、科学読本としての機能と哲学性を兼ね備え、読者に生物多様性の豊かさを味わわせる本だと言えます。

アルベルト・シュヴァイツァーの名言、「世界を感じてこそ世界とつながれる」のようです。書中で本川達雄は文字の力を借りて、知識を例証に融合させ、色とりどりの生態の世界を読者に開け放した。色とりどりの生態の世界を読者に開け放しました。

相利共生の不思議には驚嘆せざるを得ません。イチジクコバチとイチジクの受粉という共生や、樹木と菌根菌の栄養を介した共生などです。こうした相互に依存し「共存しうる」生物の関係は、生物に共に進化することを促し、生物多様性をきわめて豊かにしています。

最も印象に残っているのは、生物共生の最高傑作に数えられるであろうサンゴ礁です。サンゴ礁は栄養の乏しい熱帯の浅い海に分布していますが、海洋の中で最も豊かな生態系になっています。この奇観は、サンゴと褐虫藻の共生と切り離せないものです。サンゴは褐虫藻に対して至れり尽くせりだと言えます——栄養の不足？褐虫藻は「地産地消」で、細胞内にサンゴの排泄物を吸収して窒素、リンを得ています。二酸化炭素不足？褐虫藻は「ご近所のみ」を利用し、その場でサンゴの吐き出す二酸化炭素を光合成に用いています。住処の必要？サンゴは褐虫藻の快適性のため、わざわざ自身の構造を木の枝のように分かれた形に変化させているのです。その形により光を受ける面積が広がっ

て褐虫藻が十分に日差しを浴びられるうえ、紫外線をカットするフィルターとしても働き、褐虫藻の葉緑素が壊れるのを防いでいます。褐虫藻も食物と酸素をサンゴに見返りとして提供しています。

ここから、この両者は資源の限られた環境の中で、効率のよい共生を通じて、資源の循環利用を実現していると分かります。「人類の生存の手本」と呼べるものです。しかし、この見事な生態系は、気候の温暖化、海水の富栄養化によって危機に陥っています。1980年代に空前の大規模な白化現象が起り、毎年5%~20%のサンゴ礁が脅威を受けています。

そして生態環境が悪化して、生物多様性が激減するのは、すべて人類の「功利主義」、そこから利益をかすめ取る行為のせいです。「生物多様性条約」の前文を解読してみると、人類が生物多様性を評価する二種類の価値観が得られます。一つは内在価値論で、生物の「存在そのものに価値がある」という考えですが、この観念は「自然を畏敬する」道德のハードルが高く無力そうです。もう一つは手段価値論で、「人間中心主義」に従って、自然を道具として扱うものです。こちらが目下の主流となっており、本川達雄もここを出発点として根本を探求し、人の定義——「私」とは何かを再評価することにより、「生物多様性がどうして重要なのか」を述べています。これは全書で最も深く考えさせられることだと言えます。

この複雑な問題と向き合って、作者は「生物の永続」という高い目標を大前提に、論理的探求を展開することを選びました。彼は初めにリチャード・ドーキンスの「利己的な遺伝子」理論——「遺伝子」を複製機能の乗り物とみなし、複製の偏りを認め、わずかな違いのある「個体」を「同一のもの」とみなす——に基づいてヒトの繁殖過程での遺伝、変異に新たな解釈をしています。ミクロの遺伝子にとって、「私」と完全に同じ遺伝子の序列は再現不可能であり、「私」は古今を通じて唯一無二の存在です。マクロの個体にとっては、過去の祖先から未来の後輩まで、内部の遺伝子の違いはきわめて小さく、いずれも絶えず延々と続く、永遠に消えない「私」と見なせます。ここから、「私」は永遠に二つの二律背反する矛盾——結局は死ぬことと永久に消えないことの矛盾、唯一無二と絶えざる複製の矛盾——の中にいると言うのです。

「私」がこのように矛盾だらけだとした上で、作者ははっきりと「私」の範疇を改めて拡大し―「時間の上でも空間の上でもまわりと切れてはおらず」後代、環境を含めています。「私」の周辺の事物の多様性をはっきり見分けるには、先に自身の内部の多様性から着手しなければいけません。

生、老、病、死……こうした個々の生命の中で嫌悪されるところも避けるべきではなく、生命の中の多重の形態として「私」の一部を構成し、生命の継続を助けています。そのため、「私」の周囲のあらゆる事物に直面して、一方的な「多様観」で簡単その存在の価値を否定してはいけません。「好み至上主義」への偏向を放棄し、貨幣経済の目からの「物量主義」を是正して、「都合がいいものも悪いものもあってこそ多様」、「それぞれ異なっている物事の多様な存在こそ豊かさだ」という観念を受け入れなければ、物事の多様性の中から豊かな「私」を探し出すことはできません。

「私」と「多様性」に対する区切りと価値の判断があれば、「どうして生物多様性を保護すべきなのか」の答えが真に迫ってきます。生命が続くという至高の目標を「私」が実現するならば、生物多様性は必要条件です。時間を見渡して、「生物学の世代間倫理」によると、子孫後裔も「私」の継続であり、生物多様性を保護することは、生存のよりどころとする環境を後代の人に残しておくことです。空間を見渡すと、ヒトの「人」たるゆえんは、多様な生物の発生と結びつき、自分に取り込むからであり、それでこそ豊かになるのです。

古くは『創世紀』の中で、「ノアの方舟」神話を引いて「生物多様性」の重要性が明示されています。いまどきになって、人類はかえって「目先の利益ばかり考えて将来を考えず」、あまりにも利己的なため、生物多様性の激減を招いています。このままでいけば、永続はでたらめとなり、後世の「私」も環境との断絶により「失格」となります。

平安な中にも危難に対する備えを考え、本川達雄は「次世代も環境も〈私〉だとみなす、時間的にも空間的にも広い利己主義にすれば、まわりとも未来ともつながった豊かな己を実現できる。そして〈私〉も社会も永続できる」と呼びかけています。積極的に生物多様性を保護することは、人類の存続に関わる大計です。「美しきものはそれぞれに美しく」、「多様性」を尊重し、生物に存

在する固有の価値を肯定して、「共存しうる」ために「私」を自然と結びつけ、自分のことと捉えて和やかに共存していけば、「天下が平和に栄え」ことができ、人と自然の永続を実現できます。

---

①本川達雄（著）、張宏岩（訳）、『生物多様性』、新星出版社、2020年版。